

令和7年度 関屋小学校研究計画

関屋小学校学力向上部

1 研究主題

意欲をもって学び続ける力の育成
～「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を通して～

2 研究主題設定の意図

研究の経緯

令和2年度から全面実施となった小学校学習指導要領では、育成を目指す資質・能力を明確化した上で、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善が求められている。

それを受け当校では、令和3年度より教師と子供が学習のルーブリックを共有することで、児童の学びの意欲を引き出し、確実に資質・能力を身に付ける授業を目指して取り組んできた。また、学習の過程では、GIGAスクール構想により配当された1人1台端末を効果的に使いながら、対話的な場の設定も大切にして授業を進めることで、一定の成果を上げることができた。

さらに令和6年度は、1人1人の学びをより深める目的から、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を研究対象に加え、取り組んできた。

今後は、その取組をより一層深めていきたいと考えている。

子供の実態

当校の子供は、学習に意欲的であるとともに、基礎的・基本的な学習能力が身に付いている子供が多い。タブレット端末の操作にも慣れ、ロイロノートを中心としたアプリケーションを活用し、思考ツール等を使いながら考え、自分の考えを整理していく力を習得している。

昨年度は、個別最適な学びを進めていくための土台づくりとして、学習形態や学習方法、学ぶための資料等を選択しながら進める学習に取り組んできた。また、過去3年間の取組を継続し、教師と子供がルーブリックを共有し、自分のめあてとゴールをもちながら授業を行っている。しかし、明確な意図をもって自己決定をしながら学び、他とかかわることで学びが深まることのよさを実感する姿にまでは十分至っていない。

これらのことから、当校の重点目標である「意欲をもって学び続ける力の育成」を主題としつつ、自身で学び方や学習のゴールを選択し、必要な知識や情報を得たり活用したりする力を養っていくことを目指し、副題を「「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を通して」とした。

3 目指す子供像

課題解決に向けて、自らその方法を考えたり選んだりしながら、友達と協力して学ぶ姿

「個別最適な学び」は、「指導の個別化」と「学習の個性化」の2種類に分類される。

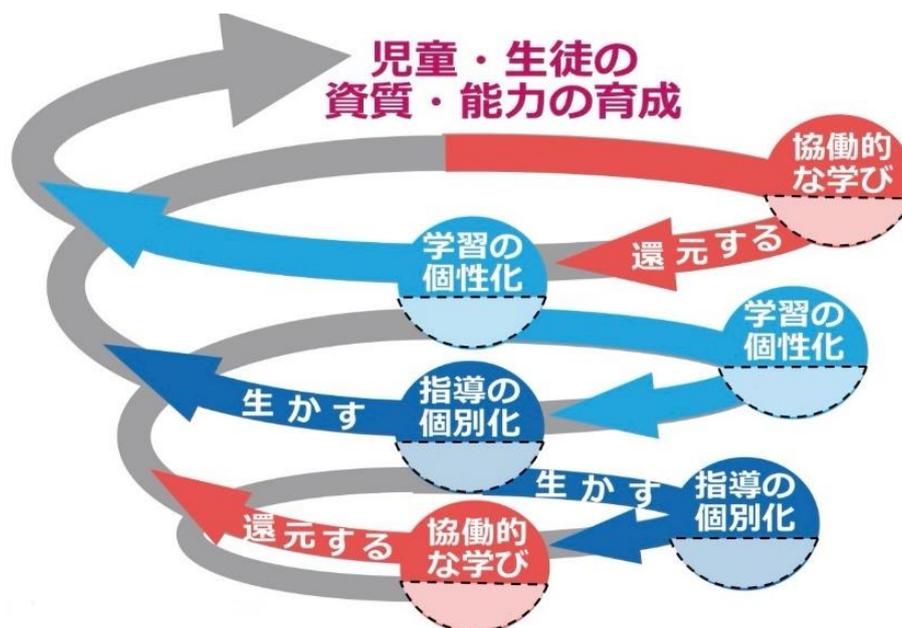
「指導の個別化」は、一定の目標を全ての子供たちが達成することを目指し、子供に応じて異なる方法で学習を進めることである。そのために教師は、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことが必要である。

「学習の個性化」は、個々の興味・関心等に応じた異なる目標に向けて、学習を深め、広げることがを意味する。その中で子供自身が自らどのような方向性で学習を進めていくとよいかを考えていく必要がある。

子供は、興味・関心や課題解決するための手段や方法のよさを知り、自ら選択をしながら学習する。そして、個別学習で得た個々の知識や考えを協働的な学びで他者の知識や考えと比較・分類・関係づけしたり、自分の考えを多面的に捉え直したりすることを通して「深い学び」にたどりつく。今後さらに、協働的な学びで習得したことを個に戻ってフィードバックし、経験を蓄積していくことで、学んだことが「他の授業でも使える」「社会に出てからも役に立つ」といった感覚をもてるようにしていきたい。

4 研究仮説

教師が子供をよく見取り、一人一人に合った学習方法や学習課題を自己決定させ、子供の選択に応じて必要な支援をしたり、必要な視点をもとに他とかかわり合いながら学習させたりすることで、子供は他と協力しながら深い学びをすることができる。

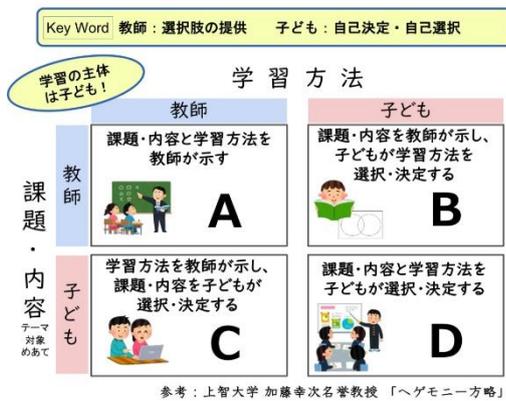


子供が目標に向かって個別の学びと協働的な学びを行き来しながら、資質・能力を育成して学びを深めていく。

5 研究内容

(1) 子供の学び方を意識した授業づくり

新潟市教育委員会が示しているA～Dの4つの型を意識した授業づくりを行う。



※授業公開は、A以外のB・C・Dパターンで行う。

【Aのパターン】

教師が授業の大半を主導する一斉的な指導。子供を見取りやすく、学級全体を着実にゴールに導きやすい。

【Bのパターン】

子供に学習方法・教材・時間等の選択肢を提供し、自己決定させる。特性や進度、到達度等の個人差に応じる支援。基礎基本の指導・支援に効果的である。

【Cのパターン】

子供に、課題や内容を自己決定させる。追求意欲を喚起したり、学習への主体性を育んだりすることができる。

【Dのパターン】

課題や内容、方法も子供に委ねる。子供が学びの主体者となり、資質・能力が育まれる。探究や活用場面で効果が期待できる。

(2) 子供が自己決定・自己選択をする場面の設定（個別最適な学び）

単元導入段階もしくは単元の中核となる活動の前に、作品例や単元末の状態を示して子供にゴールイメージや見通しをもたせる。そして、ねらいを達成するために、子供たちが自分に合う方法や必要な物などを選択するようにさせる。今年度は、選択させるだけに留まらず、子供自身がそのよさを理解した上で自己決定できるようにしたい。そのため、教師は見通しをもって段階的に、選択できるための手段を子供に身に付けさせていく。また、子供の選択に応じて、教師がどのような支援をしていく必要があるかを探っていく。

※昨年度実践での自己選択・自己決定の場面

1年生 算数	・考えを説明するカードを選択させる。	・難易度の選択
2年1組 国語	・メモの形式を選択させる。 ・自分の困り感をいつでも相談できる場を確保する。	・ツールの選択 ・学習形態の選択
2年2組 国語	・音読練習の工夫を選択させる。	・練習方法の選択
3年生 国語	・ツールを選択させる。 ・学習形態を選択させる。	・ツールの選択 ・学習形態の選択
4年1組 音楽	・どの手段で旋律のつなげ方を確認するか選択させる。	・活動の確認方法の選択
4年2組 算数	・個別に学ぶ時間の学習形態と道具を柔軟に選択できるようにする。 ・まとめ後の発展問題を2種類から選択する。	・ツールの選択 ・問題の選択

5年1組 家庭科	・シンキングツールを選択させる。	・ツールの選択
5年2組 算数	・共有の四角形を提示しないで任意の四角形を描かせる。	・任意の図による問題解決
6年生 社会	・調べた資料を共有し、自分の考えを確かなものにするための場を設定する。 ・選択できるように複数の資料を準備しておく。	・資料の選択
さくら 生活単元	・色々な支払い方法（RYUTO, Suica、現金）の中から自分の払い方を選択させる。 ・どの支払い方法にも対応できる練習空間を作る。	・活動の選択

（3）個別で学んだことを共有する場の設定（協働的な学び）

個別で学んだことを共有する場面では、教師は意図をもって関わらせる。子供が、比較・分類・関係づけなど、視点をもって活動できるように、関わらせる理由を明確にする。関わらせ方は、対面・端末・両方の複合型などが考えられる。

（4）ルーブリックによる振り返り

定着してきているルーブリックを継続する。活動の前に教師と子供がルーブリックを共有することで、めあてをもち主体的に学ぶことができる。また、学習の終わりにルーブリックによる振り返りを行うことで、子供は自分がどのレベルにいるかが明確になり、次のめあてがもちやすくなり、成長も実感しやすくなる。

6 研究方法

- ・年に1回研究に沿った授業を公開し、日常の取組や成果等を振り返る。
- ・原則として、一人一回の研究授業を行い、授業や単元での子供の姿から手立ての有効性や研究の方向性について検証する。
- ・大研授業では、外部講師を招聘する。

7 指導案の形式 ……HP用につき省略

8 研究授業の進め方

（1）研究授業の方法

	大研	小研
単元の検討	全体で1本	大研以外の人
本時の検討	全体 授業日の3週間前まで	グループ 授業日の2週間前まで
指導者	外部講師	希望があれば外部講師
参観・協議会	全体	グループ+管理職

指導案の締め切り	指導者招聘：授業の10日前までに起案。1週間前に指導者に届くように送付 指導者なし：授業の3日前までに起案	
指導案の配付	全員	検討時はグループと管理職、研究主任。最終版は全員。

- ・大研を年に1回。他は小研とする。小研はグループ研修を基本とするが、別グループの授業研究に参加してもよい。
- ・本時の検討は、指導案検討方式。授業者の説明後、質疑応答をして、本時の検討を行う。
- ・研究教科は自由。授業パターンB～Dのどれを選択したか分かるようにする。
- ・授業後、協議会を行う。
- ・指導案は、検討会の3日前までに本時の展開前までと、選択場面・関わらせ方の視点・ルーブリックを示せるようにしておく。検討会後に完成させる。職員は、当日までに授業者の指導構想に目を通しておく。
- ・初任者と特別支援学級の担任、級外は、グループには所属するが、授業公開は行わない。

(2) 授業グループ ……HP用につき省略

9 研究予定 ……HP用につき省略

【参考文献】

- ・「新潟市授業づくりサポート ver. 1」新潟市教育委員会 R5.12
- ・「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」文部科学省初等教育局教育課程課 R3.3
- ・「授業づくりネットワーク No.40」学時出版